チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2017年5月NO.42

SMILES

https://www.childfund.or.jp

特集 ともに歩む

スポンサーシップ・プログラムを通じたつながり

ChildFund Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、
アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、
家族と地域の自立を目指した活動をしています。

特集 ともに歩む

スポンサーシップ・プログラムを通じたつながり

スポンサーシップ・プログラムはチャイルドの健全な成長を継続的にはぐくむ支援方法です。支援を受けるチャイルドがスポンサーの方に感謝の気持ちを抱くのはごく自然なことです。それと同時に、支援する側のスポンサーの皆さまが、「活動に感謝しています」、「支援ができてよかった」という感謝の気持ちを伝えてくださることも多くあります。それはスポンサーシップ・プログラムが、スポンサーの方とチャイルドのつながりを深める一面をもっているからではないでしょうか。今回はそのつながりのいくつかをご紹介いたします。

手紙を通したつながり

30年ほど前、猿渡公予さんはチャイルド・ファンド・ジャパンの活動紹介の映画を見て、この世界で一人でも多くの子どもが楽しい日々を過ごすことができるよう、少しでも力になりたいと思いました。無理をせず長く続けるためにも、最初はご自身が所属する日本福音ルーテル玉名教会の教会学校の皆さんと一緒にご支援を始めてくださいました。

そして、もっと深くチャイルドと1対1で関わりたいと思い、個人としてもチャイルドの支援を始めてくださいました。5人のお孫さんがいる猿渡さんは、フィリピンに暮らすアイラをチャイルドとして紹介された時、かわいい孫がもう1人増えたと喜びました。

猿渡さんから初めてもらったお手紙でご家族を紹介されたアイラは、お返事の手紙で喜びの気持ちを伝えました。「ご家族のことを教えてくれてとてもうれしいです。猿渡さんがお孫さんと遊ぶことが楽しいと聞いて、とてもすてきだと思いました。そして、私もお孫さんの1人に

アイラが猿渡さんにお手紙を書いているところ

入れてもらって、ありがとうございます。本当にうれしいです!」その後も手紙のやり取りを通じて、お互いの交流を深めていきます。

2016年4月、震度7の大きな地震が熊本をおそいました。繰り返し起きる余震、いつ収束するのか分からない状況が続き、被災地に暮らす方々は不安な日々を過ごしていました。熊本県玉名市に暮らす猿渡さんも熊本地震の被害を受けた1人でした。お孫さんを含め家族は無事であったものの、自宅の壁の数ヵ所に亀裂が入る被害がありました。

そのような時、猿渡さんにアイラから励ましの手紙が届きます。「猿渡さんとご家族の皆さんがお元気でおられますように。私はいつも猿渡さんのことを想っています。神さまが猿渡さんとご家族をずっとお守りくださいますよう、心からお祈りしています。」

猿渡さんは「余震で落ち着かないなか、お手紙を受け取り涙が出ました。本当にありがたかった」と、手紙を受け取った時のことを振り返ります。「いつ元の生活に戻れるか分からず、気持ちが滅入っている時に届いたアイラからのお手紙を読んだとき、自然と熱いものがこみあげてきました。どれだけ元気をもらったか分かりません。遠くにいても私を支えてくれる孫の成長を、私も支えたいと願っています。」

アイラからのお手紙が届いて喜ぶ猿渡さん

異なる文化とのつながり

明治学院東村山高等学校の皆さんは、各クラスで1人のチャイルドをご支援くださっています。クリスマスやチャイルドの誕生日には、皆さんが心をこめてカードを手作りし、チャイルドに送っています。文化祭ではフィリピンの歴史や食文化、チャイルドたちの暮らしぶりについて調べて、工夫をこらして展示します。皆さんにとってスポンサーシップ・プログラムは、自分とは異なる文化に出会い、フィリピンという国を身近に感じる機会になっています。

生徒の1人は次のように話してくれました。「自分のお小遣いの中から毎月献金するのは正直なところ大変です。でも私の大変さは、例えばCDが買えない、というくらいのもので生活できなくなるわけではありません。そう考えると、フィリピンの子どもたちの生きる希望となるならば、これからも続けて献金していきたいと思います。」また、高校1年生のボランティア委員会の顧問を担当されている権藤信隆先生は、「1人の力は小さくともみんなが力を合わせれば大きなパワーとなります。生徒にはみんなで一つのことに取り組むことの大切さを学んでもらいたいと思っています」と話します。

(上)明治学院東村山高校1年生のボランティア委員の皆さん

(下)チャイルドに送る手作りのクリスマスカードを文化祭で展示しています

チャイルドとのつながりを通じて、自分がやりたいことに気付き、国際協力の道を進路として考える生徒もいるそうです。「先生、自分のやりたいことが見つかりました!」と生徒に言われた時に、この活動が持つ意義を感じた、と権藤先生は嬉しそうに話してくれました。

フィリピン訪問の旅2017

2017年2月、9年ぶりにフィリピン訪問の旅を実施しました。今回は35名の方々が真冬の日本から夏の気候のフィリピンへと降り立ち、6日間かけて4つの支援地域を訪問しました。

参加した皆さまは、地域の人々の温かい歓迎を受けました。フィリピンの一般的な乗り物であるトライシクルやジープニーで移動し、スタッフによる熱心な支援事業の説明に耳を傾けました。また、参加者の皆さまもフィリピンの人々の歓迎に応えるべく、みんなで歌を披露したり、バルーンアートや折り紙を作ったりと、楽しい交流の時間を過ごしました。

トライシクルに乗って
チャイルドの家を訪問しました

そんな中、支援をしているチャイルドに実際に会えたことは、特別な思い出として参加者の皆さまの心に刻まれました。「手紙では分からない、チャイルドの声や話し方、素振りを知れたこと、家庭の様子を見られたことがよかったです」、「自分の気持ちを自分の言葉で伝えられたことがうれしかった」、「家族みんなで支援している我が家のチャイルドに会えて本当によかった。愛おしい気持ちでいっぱいになりました。」チャイルドと涙を流しながら抱き合う姿や、お互いに恥ずかしそうに会話をする様子、優しくつながれた2つの手と手、あっという間に過ぎていく穏やかな時間。訪問の旅は、喜びと優しさであふれていました。

チャイルドにバルーンの作り方を教えています

(左)チャイルドとの対面、あっという間にお互いの心が通います
(右)チャイルドたちがダンスで迎えてくれました

親から子へ

今回の訪問の旅は、親子で参加された方々が多くいました。その中の1人、藤田喜代子さんは大学生の息子の知之さんと一緒に参加されました。喜代子さんは、訪問の旅のアンケートに、息子さんと旅に参加された想いを書いてくださいました。「今回の旅に息子と一緒に参加したのは、私が息子に与える最後の教育の機会だと思って、なかば強引に連れてきたのでした。社会人になって自分でお金を稼ぐようになった時に、自分の利益のことだけを考えるのではなく、つねに社会的な弱者の存在を忘れないでいてほしい、との願いを込めての旅でした。」

喜代子さんがスポンサーとしてご支援くださるようになったのは今から20年以上も前、知之さんが産まれる前のことです。母親になり、子どもを育てるようになってからは、チャイルドの両親の気持ちを想像するようになりました。子どもに健康に育ってほしい、十分な教育を受けてほしいと願うのは、日本であってもフィリピンであっても、すべての母親に共通する願いです。知之さんと重ねながらチャイルドの健全な成長を願い、より一層強くチャイルドのことを想うようになりました。

ご家族で撮った写真をチャイルドに送って交流していました

喜代子さんは、フィリピンやチャイルドに興味を持てるよう、知之さんが幼い頃から、チャイルドに送るクリスマスカードに名前を書かせたり、チャイルドから届く手紙や写真を見せたりしていました。毎年送られてくる成長記録で、チャイルドが成長していく様子を見守ることが、家族全員の楽しみになっていました。

一方、知之さんは、小学生のころ、チャイルドの成長記録や手紙を読んで、フィリピンの子どもたちはどうしてこんなに痩せているのだろう、絵が上手だな、英語で手紙を書いていてすごいなと、チャイルドのことを同年代の友だちとして感じていたそうです。しかし、中学、高校と、国際問題や途上国の貧困についての理解を深めるにつれ、友だちと認識していたチャイルドのことを、「支援をしている」のだと意識するようになりました。

そのような中、喜代子さんに誘われて参加した今回の旅で、知之さんは観光旅行では経験できないようなディープなフィリピンに触れることとなりました。フィリピンで出会ったチャイルドたちは、身体は小さいけれどみな元気いっぱいで、はつらつと日々を楽しく過ごしていました。人なつこくて明るいフィリピンのチャイルドから、元気や幸せをたくさんもらいました。そして、チャイルドや家族のことを、支援を必要とする対象と見るのではなく、同じ人間としてより対等な立場で接することの重要性に、新たに気づくことができました。

チャイルドと楽しい時間を過ごしました

現在、大学の政治経済学部で国際政治を専攻する知之さんは、将来は国際的な仕事に就きたいと考えています。スポンサーシップ・プログラムを通じてチャイルドとつながったことが、知之さんの未来にもつながっています。

最後に喜代子さんが話してくださった言葉が、スポンサーシップ・プログラムの本質を表しているのかもしれません。「チャイルドから手紙をもらうと、温かく、優しい気持ちになります。家族でチャイルドの成長を喜び、写真の笑顔にいやされ、明日からもまたがんばろうという意欲がわいてきます。私がチャイルドから受け取るものは、私がチャイルドに差し出すものよりも、ずっと価値があるものだという気がしています。」

訪問の旅でチャイルドに会った時の喜代子さんと知之さん

スポンサーのことを「精神里親」と呼んでいた時代があります。それは日本に暮らすスポンサーの方々が遠く離れた国に暮らすチャイルドの、精神的な里親であるという意味でした。支援を通して、心と心がつながり、ともに歩んだ時間はかけがえのない新たなつながりを生み出していきます。これを読んでいらっしゃる皆さまとのつながりを、チャイルド・ファンド・ジャパンはこれからも大切にしていきます。

ネパール大地震から2年が経ちました

その被害の大きさから、大規模かつ長期となったネパール大地震への緊急・復興支援。髙田和彦理事長、福嶋美佐子副理事長が現場を訪問しました。

2016年10月、髙田理事長がネパールを訪問し、支援地域を視察しました。シンドゥパルチョーク郡の3つの学校と、スポンサーシップ・プログラムの支援を受けるチャイルドの家庭を訪問し、話を聞きました。ネパールの訪問は初めてとなる理事長でしたが、「被災地の過酷な状況を目の当たりにすると、これからも私たちが長期にわたって子どもたちを支える必要性を痛感する」と、継続的な支援への決意をあらたにしました。

チャイルドの家を
訪問する髙田理事長（左から２人目）

開校式では記念として、額に入った学校の写真が
福嶋副理事長（右）に渡されました

2017年4月末には、チャイルド・ファンドの支援によって校舎の建設、再建を終えた学校の開校式が相次いで行われました。4月24日、2つの学校の開校式に福嶋副理事長が出席しました。生徒たちや地域の人々による歌や踊りの歓迎を受けたあと、副理事長は「悲劇的な大地震をお互いに助け合いながら乗り越えた皆さんを尊敬します。築かれた地域の絆を、子どもたちへの教育を通じてさらに強くするため、私たちも地域の一員と思っていただければ嬉しいです」と、お祝いの言葉を述べました。

翌25日、大地震の発生から2周年となる日をおぼえて、ネパール事務所と3つの協力団体のスタッフ、約50名が参加する式典を行い、犠牲となった人々への祈りをささげました。また、過酷な現場で日々の支援活動を担ってきたスタッフの働きをねぎらい、副理事長から一人ひとりに感謝状が手渡されました。6月からネパール事務所長に就任するアイリーン・サンチアゴからは「私たちを支えてくださる多くの人々のことを忘れず、子どもたちのためにこれからもがんばりましょう!」と、スタッフたちを勇気付けるメッセージが送られました。

式典のあとスタッフ全員で集合写真

**ネパール大地震への緊急・復興支援にご協力くださった皆さまに、深くお礼申しあげます。
チャイルド・ファンド・ジャパンは引き続き、ネパールの子どもたちの権利を守るための活動を行っていきます。
これからも温かいご支援をくださいますよう、心よりお願いいたします。**

緊急支援

フィリピン台風26号 緊急・復興支援プロジェクト

協力期間：2016年12月28日～2017年5月31日
支援対象：南カマリネス州（センター40）の被災チャイルドとその家族、協同組合の組合員、デイケアセンターに通う子どもたち
協力団体：センター40

2016年12月25日、クリスマスの日にルソン島に上陸した台風26号は、家屋や田畑に甚大な被害をもたらし、38万人が避難する事態となりました。台風の進路にあった協力センター40（南カマリネス州）では、チャイルドと家族に人的被害はなかったものの、家屋や農作物に壊滅的な被害がありました。

この地域の主な産業は農業で稲作やココナッツの栽培が盛んです。台風によって収穫直前の稲が浸水したり、畑の作物が流されてしまい、ココナッツやバナナの木も根こそぎ倒されました。

チャイルド・ファンド・ジャパンは直ちに緊急支援の実施を決定し、全てのチャイルド126世帯にお米10kgを配布し、家屋の修復、生計支援（農業再開のための籾や野菜の種の配布）、協同組合の事務所の再建、デイケアセンターの屋根・天井の修復、センターの屋根の修復などの緊急支援を実施しました。毎年のように台風が襲来し、被害が出るこの地域では、センターはチャイルドや住民を対象にした「災害リスク管理」のプログラムを実施してきており、緊急避難体制や緊急支援物資の配布などの体制が整っていたため、被害を最小限に抑えることができました。

台風の被害はありましたが、皆さまのご支援により2017年5月末には予定通り、地域の自立を果たすことができます。

全壊したチャイルドの家

家屋の修復の様子

緊急支援

熊本地震への緊急支援

協力期間：2016年4月21日～2017年8月31日
支援対象：熊本地震の影響を受けた方々、子どもたち、保護者、保育者
協力団体：ルーテル学院大学、熊本いのちの電話

2016年4月14日、熊本地方を震源とする最大震度7の地震が起こり、その後も16日の本震を含め大きな地震が継続して発生しました。チャイルド・ファンド・ジャパンは4月21日にはスタッフを熊本に派遣し、「子どものこころのケア」を中心とした緊急支援を開始しました。

支援の一つに、自殺予防のための活動をしている「熊本いのちの電話」との協働があります。被災した方々が通話料金を負担することなく電話相談ができるよう、2016年7月からフリーダイヤルを設置し、チャイルド・ファンド・ジャパンはその通話料や設備の更改を支援しています。いのちの電話の相談員は、2年間の訓練を受けた専門家として、ボランティアで相談にあたっています。「夫と子どもから暴力を受け、自分は車の中で生活している」、「精神的にずいぶん楽になった。いのちの電話に感謝している」など多様な声に耳を傾け、熊本地震で被災した方々に寄り添っています。

仮設住宅団地の掲示板に掲出されたポスター

事務局長就任のお知らせ

2015年4月1日より事務局長を務めてまいりました和山正秀が2017年2月末で退任いたしました。2017年4月14日より、武田勝彦が新たに事務局長に就任いたしましたので、皆さまにご報告いたします。温かいご指導とご鞭撻を賜りますよう、お願い申しあげます。

チャイルド・ファンド・ジャパン　理事長　髙田和彦

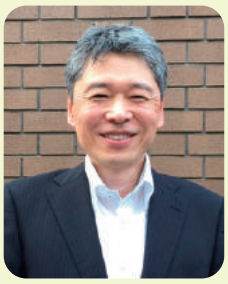
就任のご挨拶

第二次大戦後の日本で多くの戦災孤児を救い、希望の光を与えた基督教児童福祉会を母体に発展してきた本団体に導かれ、誠に光栄に存じます。戦災孤児のために尽力したクラーク博士、ミルス博士、バット博士など先人から手渡された篤い想いを、ひしひしと感じています。

私は中学時代にボートピープルと呼ばれたインドシナ難民を自宅でお世話したことがきっかけで国際協力の道に進むことを決心しました。民間企業、海外留学を経て、数々の国際NGOに勤務し、長年、紛争国や途上国への駐在と出張を繰り返し、日本でも組織運営に携わりました。

支援の現場で実感するのは、支援というものは経済的に豊かな先進国から途上国への一方通行の施しではないということです。先進国の人々が忘れ去ってしまった多くのことを途上国の人々は教えてくれます。国際協力は人の豊かさとは何かを教えてくれる場ではないでしょうか。

私どもの活動にご支援いただいている皆さまに深く感謝申しあげます。本団体の使命、「生かし生かされる」国際協力を実践してまいりますので、今後ともどうかご指導とご協力をくださいますよう、よろしくお願い申しあげます。



チャイルド・ファンド・ジャパン
事務局長　武田勝彦

インフォメーション　コーナー

お知らせ　熊本地震への支援として保育者向けの冊子を制作しました

熊本地震への支援の一環として、「被災後の子どもの安心のために保育者ができること」と題する冊子を学校法人ルーテル学院と協働して制作しました。「子どものこころのケア」と熊本の保育者の体験を紹介する「私たちがやったこと」の2部構成になっています。熊本県内の保育者の方を対象として作成された冊子ですが、地域を問わず平時の保育の場における防災の取り組みや災害への備えにおいても活用できる内容となっています。ダウンロード可能なPDF版をウェブサイトで公開しています。

被災後の子どもの安心のために保育者ができること　検索

お知らせ　マイレージのご寄付に関する変更について

デルタ航空の「スカイウィッシュチャリティ」は、マイレージを寄付することによって、チャリティ団体の活動を支える支援方法です。チャイルド・ファンド・ジャパンも、皆さまからいただいたマイレージをスタッフが出張する際に利用することで、その分の経費を支援活動に役立ててきました。このたび、チャイルド・ファンド・アライアンスの連携の一環として、チャイルド・ファンド・コリアへの寄付を通じて、ネパールへの支援などに活用することになりました。今後は、チャイルド・ファンド・コリアにマイレージをご寄付くださいますよう、お願いいたします。

お知らせ　フィリピンの協力センター40が自立します

チャイルド・ファンド・ジャパンとセンター40は協議の結果、2017年5月末で地域(ルソン島南カマリネス州)への支援を終結することに合意しました。1998年の支援の開始からこれまでに426名のチャイルドが支援を受けました。今後は住民自らが立ち上げた協同組合が中心となって、地域での活動を続けます。長年にわたる皆さまの温かいご支援に心からお礼申しあげます。

ChildFund Japan　Vision Mission

**チャイルド・ファンド・ジャパンは
ここに掲げるビジョン(目標)、ミッション(使命)に
基づいて活動します。**

ビジョン(目標)
すべての子どもに
開かれた未来を約束する
国際社会の形成

ミッション(使命)
生かし生かされる
国際協力を通じて
子どもの権利を守る

チャイルド・ファンド・アライアンス　ChildFund Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う11団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

<チャイルド・ファンドだより SMILES(スマイルズ)> 2017年5月発行
特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
理事長／髙田和彦　事務局長／武田勝彦
TEL. 03-3399-8123　FAX. 03-3399-0730
E-mail:childfund@childfund.or.jp
URL:https://www.childfund.or.jp/

〈デザイン〉
モスデザイン研究所
〈印刷〉
有限会社東西印刷
PRINTED WITH SOYINK 大豆油インキを使用